共八

高等小學讀本

文部省著作

五

發行所

日本書籍株式會社

K14
Mo

国立国語研究所
72432
図書館



文部省著作
高等小學讀本
五

發行所　日本書籍株式會社



目錄

第一課　氣のかはり易き男……一
第二課　分業……四
第三課　胃の說諭……九
第四課　貨幣……十三
第五課　物の價……十八
第六課　萬里の長城……二十四
第七課　鴻門の會（一）……二十七
第八課　鴻門の會（二）……三十二
第九課　諸葛孔明……三十八
第十課　象……四十一
第十一課　象狩の話……四十五
第十二課　はわい出稼人の手紙……四十九
第十三課　珊瑚……五十三
第十四課　にゅーとん……五十七
第十五課　獅子……六十二
第十六課　母の愛……六十六
第十七課　皮膚の養生……七十
第十八課　しゃぼん……七十三
第十九課　ウラヂオストック……七十七
第二十課　ペてろ大帝……七十九

第一課　氣のかはり易き男。

世に愚なる男あり。

はじめは、そのまゝになりたるが、

手にとる斧が重しとて、

や

きれども、日々に、大いなる

鋸持つが苦しとて、木挽をうちすて

またも、木挽をうちすて、

今度は、大工となりけり。

大工は手斧があぶなしと、

恐れて、次は、屋根屋業。

屋根の高きに驚きて、

これもつづかず、つとまらず。」

次には、かはる、疊（たゝみ）さし。

とこ厚しとて、これもやめ、

鍛冶屋（かぢや）になりてみたれども、

夏の暑きに困りたり。」

農夫となりて、田を作る、

その職業をはじめしに、

「こえ臭ければ、いや。」といふ。

きて、その次は何なるぞ。」

杵（きね）重ければ、米搗（こめつき）も、

少しの間にて見限りつ。
紙屑拾をはじめしが、
賤しきわぎとて、廢しけり。」
あー。愚なるこの男。
今は、なすべきわぎもなし。
若き昔の怠を
悔いて、泣けども、いかにせん、
身は、はや老いて、手はきかず、
人の惠をたのみにて、
ちまたに叫び、門に乞ひ、
つなぐ命のあはれさよ。」

第二課　分業。

まっちはきゝいなものである。また、價もやすくて、一包、十二箇が、三錢ぐらゐで買はれる。しかし、もし、これを、一人で造るとしたら、どうであらうか。たとひ、休まず働いても、一日に、一包は造れまい。かりに、造れたとしても、それを、三錢ぐらゐで賣って、どのくらゐのまうかるであらうか。まっちの製造所に行って見ると、職人が、おほぜいをって、それぞれ、手分をして、働いてゐるずなはち、材木を器械にかけて、軸木（じくぎ）をこしらへるものもあり、軸木を、火で乾かすものもあり、乾かしたものゝ、先に、藥をつけるものもあ

る。また、きらに、それを、溫室で乾かすものもあり、乾かしたのをそろへて、まっちの箱に入れるものもあり、箱に入れたのを、十二づつ集めて、紙に包むものもある。ずべて、このよーに、手分をして、別々の仕事をすることを分業といふ。

分業によって、まっちをこしらへると、その出來がよいばかりでなく、また、出來高が、たいそー多くて、一人一人、別々になって造るときとは、とーてい、比較にはならない。したがって、一包、三錢ばかりで賣っても、そーおーにもうかるのである。

分業は、まっちの製造のみに限らず、多くの事業に、たいそ

一、利益のあるものである。いま、改めて、その利益をいってみると、大略、次の四つになる。

分業によれば、一人の人が、つねに、同じ仕事をくりかへすのであるから、早く、そのしかたに熟練して、出來のよいものを、たくさん造ることができる。

また、分業によらず、一人で、種々の仕事を兼ねるときには、その仕事の移りかはりめごとに、居る場所をかへ、また、器具を取りかへなければならないので、むだに、時間を費すことが多いが、分業によって、それぞれ、一種の仕事にばかりかゝるときには、そんな手數がなくて、むだに、時間を費すことがない。

また、人は、その身體、才能などによって、ある仕事には適し、ある仕事には適しないといふよーなことがあるが、分業によると、じぶんに、もっとも適した仕事にばかりかゝることができる。

また、分業によって、一つの仕事にばかりかゝるときには、しぜん、それに、精神をこらすことになるから、その仕事に適する器具の發明や改良をすることもある。

分業は、このよーに、大きな利益のあるものであるが、ここに、注意しておかなければならないのは「分業によって、全體の一部一部を、それぞれの仕事をするものに、『共同（きょーどー）』といふ考がなけ

れば、何のかひもない。」といふことである。

たとへていへば、時計の各部分を、多人數で、別々に造つて も、もし、めいく、隨意な形に造らうものなら、それを組み立てゝ、一つの完全な時計に造りあげることはできないのである。

また、大きくいへば、農夫の田畑を耕し、大工の家屋を造り、商人の物品を賣買し、官吏の政務を取扱ひ、教師の生徒を教育することなども、もとより分業で、それぞれの職業に從事するものが集つて、一つの社會をつくるのである。しかし、もし、人々が、じぶんの利益ばかりを考へて、ずこしも、社會をつくるといふこと

けなかったなら、ちょーど、時計の各部分を造るものがめいめい、隨意な形のものを造るのと、同じよーな結果におちいらなければならないのである。

第三課　胃の說諭。

ある時、口が耳、目、鼻、手、足を集めて、相談會を開いた。口がいふには、

「諸君。今日、わざ〳〵、こゝに、お集りを願ったのはほかのことでもありません。あの胃についての事です。胃は、われ〳〵が、いっしょーけんめいに働いて、食物を送ってやるのに、いっこー、手傳もせず、返礼もせず、ただ、ねながら食って、遊んでばかりゐます。われ〳〵は、まったく、胃のた

めに、道具に使はれてゐるのですぢつにつまらないではありませんか。以後、一同働くことをやめて、ひとつ、あのぶしょーものをこらしてやらうではありませんか。」

といふと、一同は「きうだ。くく。それがよい。それがよい。」といって、賛成した。

そこで、足は、食堂に行くことをやめ、手は食物を口に持ちこむことをやめ、鼻はこれを嗅ぐことをやめ、目はこれを見ることをやめ、耳は食事の報知を聞くことをやめてしまった。

かうして、二三日たつと、からだじゅーが、非常に衰弱して

きて、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえて、動くことも、どう

きて、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえて、動くことも、どうすることもできなくなってしまった。

そこで、口は、また、一同を集めて「じつに、とんだことになりましたぴどうしたのでせう。」といって、相談してゐると、そこへ、胃が來て、

「諸君は、じつに、しよーのない事をしだしました。諸君は、諸君の送ってくれた食物を、私が、ただ、ゐながら食って、遊んでゐたよーに思ってゐらっしゃるらしいが、それは大きな誤解です。諸君が、からだの外部に居て、内部のことを知らないことから起った、大きな誤解です。私は、けっして、遊んでゐたのではありません。私は、私で、諸君の

かうして、二三日たつと、からだじゅーが、非常に衰弱して

送ってくれた食物を、いっしょけんめいに消化して、粥のようなものにしてゐたのです。それが、きらに、腸で消化されて、乳のようなものになり、血にまじって、からだじゅーをめぐったので、諸君も、たっしに働くことができたのです。諸君は、私が諸君を、道具に使ってゐらっしゃるらしいが、それなら、諸君も私や腸などを、道具に使ってゐらっしゃったといはなければなりません。

しかし、からだは、その各部分が、それぞれ、職務を盡すので、保っていけるのであります。誰でも、そんな、かってなことを考へて、職務を忘るよーなことがあると、からだじゅーが衰弱しなければなりません。ごらんな

きい。諸君が、私をいぢめようと思って、食物を送らなかったために、とーく、こんなにからだじゅーが衰弱しなければなりません。ごらんなさい。諸君。もし、そこに、お氣がつかれたなら、これからは、きっとその職務をお盡しなさい。それが諸君のため、また、からだのためです。」

と說諭した。耳、目、鼻、口、手、足はこれを聞いて、「きっとその職務を盡した。それで、非常に衰弱してゐたからだも、だんだん回復してきたといふことである。

第四課　貨幣（カヘイ）。

コノ世ノ、イマダ、大イニ開ケザリシ時代ニハ、人々ハ、ソノ、ミヅカラ用ヒテ、餘アル物品ヲモッテ、ソノ希望スル物品ト交換シテ、ワヅカニ、ソノ用ヲ辨(ベン)ジタリキ。サレド、ソノ希望スル物品ト交換スルニアタリテ、種々ノ不都合起リタリシコトハ、ジツタトヘバ、コヽニ、漁夫アリテ、米ヲ得ントヲ思ヒ、魚ヲ携ヘテ、近隣(キンリン)ノ農夫ヲタヅネテ、想像(ソーゾー)スルニ餘アリ。

望セズシテ、織物ヲ希望ストセバ、漁夫ハ、サラニ、織物ヲ有スル人ヲタヅネテ、米ト交換セザルベカラズ。ソノ織物ヲ携ヘ、フタヽビ、農夫ヲタヅネテ、米ト交換シ、ソノ、コレト交換シ、サレド、不幸ニシテ、織物ヲ有スルモノヲタヅネエズバ、

漁夫ハ、マタ、サラニ、所々ニ奔走シテ、魚ヲ希望スル他ノ

漁夫ハ、マタ、サラニ、所々ニ、人ヲタヅヌルホカナカルベシ。カクノゴトキ困難、アルヒハ、牛、羊ナドノ家畜ヲ用ヒタルコトアリ、マタ、五穀、織物ヲ有スルモノヲタヅネエズバ、サレバ、人智、ヤウヤク進ムニシタガヒテ、人ノ、イ、パンニ奔走シテ、魚ヲ希望スル他ノ農夫ヲタヅヌルホカナカルベシ。カクノゴトキ困難、アルヒハ、牛、羊ナドノ家畜ヲ用ヒタルコトアリ、マタ、サラニ、所々ニ奔走シテ、魚ヲ希望スル他ノ農夫ヲタヅヌルホカナカルベシ。カクノゴトキ困難、アルヒハ、牛、羊ナドノ家畜ヲ用ヒタルコトアリ、マタ、五穀、織物ヲ有スルモノヲタヅネエズバ、サレバ、人智、ヤウヤク進ムニシタガヒテ、人ノ、イ、パン

物ナドヲ用ヒ、象牙（ゾーゲ）、貝殻（カヒガラ）ナドヲ用ヒタルコトモアリシガ、人智、マス〳〵進ムニシタガヒテ、ツヒニ、金、銀ヲ用フルニイタレリ。

ケダシ、金、銀ハ、毛皮、革（ナメシガハ）、牛、羊、五穀ナドト違ヒテ、少量ニテモ、價、ハナハダタカク、携帯スルニモ、保存スルニモ都合ヨク、マタ、分ツコトモ、合スルコトモヨーイナレバナリ。

タメニ、價値（カチ）ヲ變ズルコトナク、産地異ナリトモ、成分ニ異同アルコトナキナド、貨幣（カヘイ）トスルニ、モットモ便利ナルモノナレバナリ。

ワガ國ニテハ、金貨ヲモッテ、本位貨幣（ホンイカヘイ）トシテ、イカニ多額（タカク）ナル支拂ニモ、制限ナク通用スルコトヲ得ル定ナリ。サ

レド、金ハ、ソノ價、ハナハダタカクシテ、價値スクナキ貨幣ヲ製スルニ適セザレバ、ワガ國ノ金貨ニハ、タダ、五圓、十圓ノ二十圓ノ三種アルノミナリ。シタガッテ、少額ナル支拂ニ不便ナレバ、別ニ、五十錢、二十錢、十錢ノ白銅貨、一錢ト五厘トノ青銅貨アリテ、銀貨ハ、一圓ヲ限リ、白銅貨、青銅貨ハ、一圓ヲ限リテ通用スルコトヲ得、ソレヨリ上ノ支拂ニハ、受取人承諾スルニアラザレバ、通用スルコトヲ得ザル定ナリ。

貨幣ノ代用トナルモノニ、銀行券アリ。ソヨキコトハ、ジツニ、貨幣ニマサレリ。ソモタダ、一片ノ紙ニスギザルニ、人ノ、ケネンナク、コレヲ用

ナル支拂ニモ、制限ナク通用スルコトヲ得ル定ナリ。サ

フルハ何故ゾ。コレ、銀行券ハ一種ノ約定證文（ヤクジョーモン）ニシテ、コレヲ發行セル銀行ニ、貨幣ト交換スルコトヲ得レバナリ。

ワガ國ノ銀行券（ギンコーケン）ニハ、壹圓、五圓、拾圓、貳拾圓、五拾圓、百圓、貳百圓ノ七種アリテ、コレヲ發行スル所ハ日本銀行ナリ。

第五課　物の價。

物の價は、その物に効用あること、その物の、勞して、はじめて得らるゝことによりて生ずるものなり。されば、大いに勞して得らるゝものなりとも、効用なきものは價あることなく、効用あるものなりとも、勞せずして

得らるゝものなれば、價あることなし。

たとへば、こゝに、一種の石あり。きはめてまれなるものなりとも、實用にも、裝飾にもならざるものなれば、これを買ふものなく、したがって、價あることなし。

また、日光、空氣のごときは、人の生命を保つに、必要にして、ずこしも勞せずして得らるゝものなれども、地球上に、あまねく存在して、缺くべからざるものなれば、これを買ふ必要なく、したがって、また、價あることなし。水のごときも、またしかり。されど、水は、大都會などにては、時として、價を生ずることあり。これ、大都會などにては、おほ

むね、飲料水乏(とぼ)しくして、勞することなくては、得ることあたはざることあればなり。

次に、物の價は、主として、需要(じゅよー)と供給(きょーきゅー)との多少によりて定まるものなり。需要とは、買ふべき貨幣を有する人の、物を買はんとする希望をいひ、供給とは、人の賣らんとして持ち出したる物の分量をいふ。されば、乞食(こじき)の絹布を得んとする希望は、これを買ふべき貨幣なくての願なれば、需要とはいひがたく、農夫の凶年(きょーねん)に備へんがために貯蓄せる米は、賣らざれば、供給には加はらざるなり。

きて、物の價は、供給(きょーきゅー)の需要(じゅよー)より少きときは、たかくな

り、多きときは、やすくなるものなり。

たとへば、こゝに、賣家、一軒ありて、これを買はんとする人、五人あるときは、その五人は、おのく、その家の他人の手にわたらんことをおそれて、爭ひて、たくべし。かくて、その家は、もっともたかき價をつけたる人の手にわたるべきなり。

また、これと反對に、同樣なる賣家、五軒ありて、買はんとする人、ただ一人なるときは、賣家の持主、五人は、おのおの、その家の賣れぎらんことをおそれて、爭ひて、その價をやすくすべし、かくて、もっとも、價をやすくしたる人その家を賣ることをうべきなり。

きて、物の價は、供給の需要よりも少きときは、たかくな

物の價は、かくのごとく、需要（じゅよー）、供給（きょーきゅー）の多少によりて、あるときは、非常にたかくなり、あるときは、非常にやすくなるものなれど、つひには、普通の價にもどるべきものなれば、普通の價とは、物を製造するに費せる費用と、普通の利益とを合せたるものをいふ。

たとへば、靴（くつ）を用ふることと流行し來りて、買手、にはかに增すときは、靴の價、にはかに、たかくなりて、靴屋の利益、非常に多かるべし。かゝるときは、靴屋は、きらに、多くの職人を雇ひ入れて、きらかんに、これを製造すべし。また、他人もその職業の利あるを見て、おの〳〵、爭ひて、これを製造すべし。かくするときは、靴の供給（きょーきゅー）しだいに增し來

りて、價は、やうやく、普通の價にもどるにいたるべし。

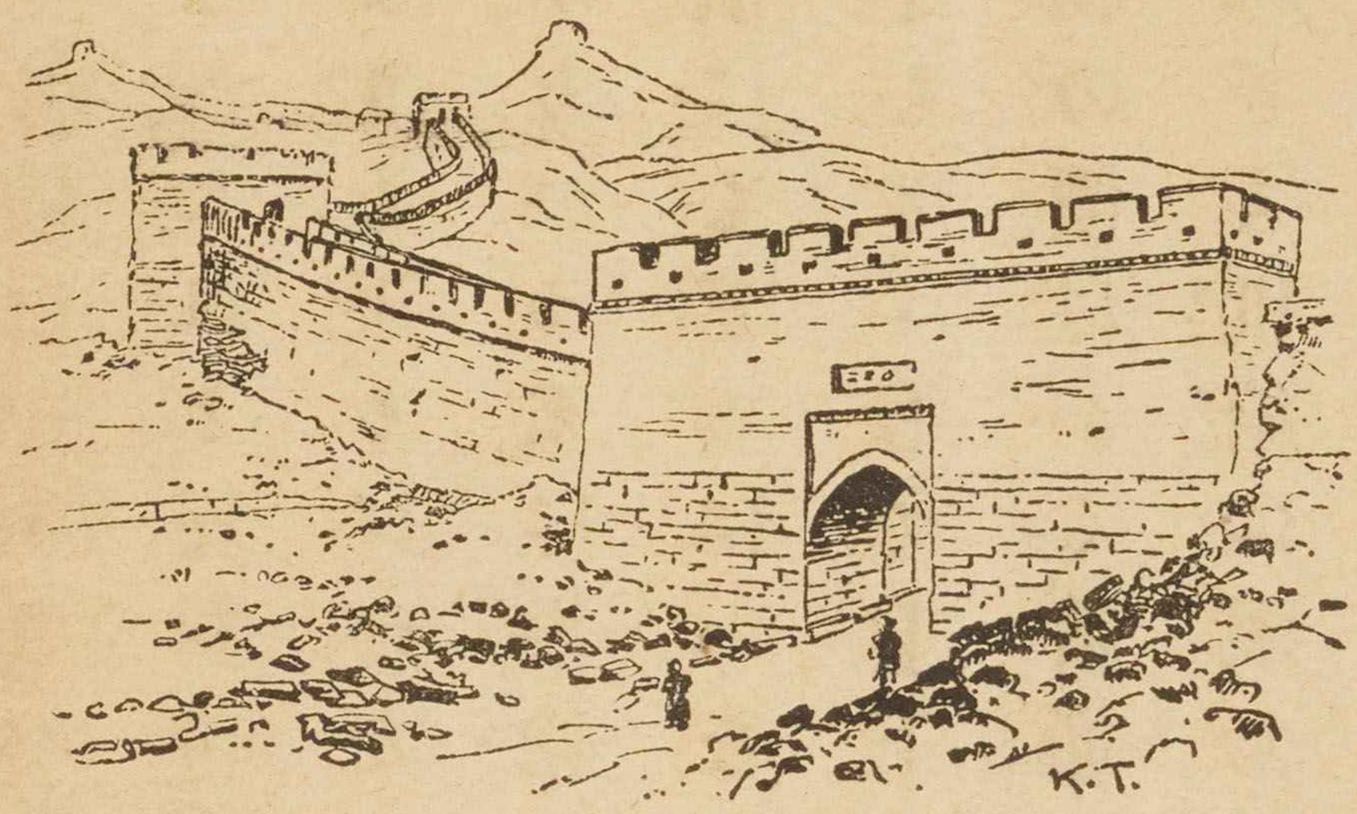
また、これと反對に、價、しだいに、やすくなりて、普通の價よりも下るにいたるときは、しだいに、その製造高を減ずるがゆゑに、供給（きょーきゅー）も、したがって減じて、價は、また、普通の價にもどるにいたるべし。すなはち、物の價は、普通の價をもとゝして上下すといふべし。

物の價は、かく、普通の價をもとゝして上下するものなれども、供給（きょーきゅー）に限ある物、たとへば、名高き古人の書畫、古器物などのごときは、需要（じゅよー）增すにしたがひて、その價、ますます、たかくなり、需要の減ずるにあらざるよりは、けっして、そのやすくなることなきなり。すなはち、供給に限

製造すべし。かくするときは、靴の供給、しだいに增し來

あるものは普通の價なしといふべし。

第六課　萬里の長城。



萬里の長城は、支那の北部にあり。世界の奇觀として、上古の遺物として、その名、世に聞えたり。

長城は、東は、山海關よりおこり、西は、嘉峪關にいたりて盡く。その間、高き山を越え、深き谷をわたり、廣き野原を横切りて、長さ、じつに、七百餘里に及べり。その城壁の主なる所は、外部を、煉瓦、または、截石に

てたゝみ、内部を、土にてうづめたり。その高さは、およそ二丈五尺、厚さ一丈五尺。上は騎行することをうべし。六十間ごとに、方形の櫓（やぐら）あり。煉瓦にて造り、高き、およそ五丈あり。城壁と櫓との上部には、凹凸（おーとつ）の胸壁（きょーへき）をまうけて、敵を射撃するに便せり。

そもそも、支那には、今より二千數百年の昔、戰國の世と稱（しょー）して、諸國の王、あひ爭ひて、大いにさわがしき時代ありき。その頃、北方の野蠻人（やばんじん）、内地の乱れたるに乘じて、しばしば侵入せしかば、諸國のうち、北方にある秦（しん）、趙（ちょー）、燕（えん）の三國は、おのく、國境に、長城を築きて、その侵入を防ぎたり。その後、秦の王は、つひに、諸國をあはせて、帝となり、みづ

から、始皇帝と稱したりしが「ながく、野蠻人の侵入するうれへを絶たん。」と思ひて、かの、秦、趙、燕の築きたる長城を修繕し、なほ、あらたに增築して、いはゆる萬里の長城を成功せり。しかして、これを成功するには、數十萬の人夫を使役し、數年の年月を費したりといへば、その大工事なりしこと、推して知るべし。今存するものは、この後、多くの皇帝の、しば〳〵修繕、增築したるものなりといふ。

長城は、かく、しば〳〵修繕、增築せられたりしかど、野蠻人の勢は、非常に强く、かつ、內地の乱れたるに乘じて侵入したりしかば、せっかくの長城も、つねに、そのかひなかりき。じつに、國家の安寧は、ただに、城の堅固なるのみに

入したりしかば、せっかくの長城も、つねに、その
りきぴじつに、國家の安寧(あんねい)は、ただに、城の堅固なるのみに
よりて得らるゝにはあらずして、おもに、國民の一致、共(きょー)
同(どー)する力によりて得らるゝものなることを知るべし。」

第七課　鴻門(こーもん)の會。(一)

秦(しん)の始皇帝は、諸國をあはせて、とーく、皇帝となったほどの人であるが、萬里の長城を築いたり、立派な宮殿を建てたりして、税を重くとりたて、また、法令をきびしくして、人民の難儀を、すこしもかまはなかったので、人民は、たいそー怨んでゐた。それで、始皇帝がなくなって、二世皇帝の時代になると、世は、ふたゝび乱れて、英雄が、諸方に起ってきた。そのうちで、もっとも、勢力のあったのは項羽(こーう)と劉(りゅー)

邦との二人である。

項羽は勇武な男、劉邦は寛大な人。いづれも、楚の懐王の下についた。懐王は項羽と劉邦とに命じて、秦をうたしめた。そこで、項羽は范増といふけらいをつれ、劉邦は張良、樊噲といふけらいをつれて、それぞれ、秦の都へ向った。が、項羽が黄河の北を攻めてゐる間に、劉邦は秦の都にうち入って、これをうち従へてしまった。

劉邦は、秦の人民を覇上といふ所に集めていふには、『われは、かつて、諸侯と、『まづ、秦の都にはいったものがその地の王とならう。』といふ約束をした。すなはち、われは、これから、この地の王となるのだ。しかし、われは、けっして、秦の

皇帝のよーな暴政は行はない。ただ、なんぢらと、法律三

皇帝のよーな暴政は行はない。ただ、なんぢらと、法律三箇條を約束する。『人を殺したものは殺す。人を傷つけたものは罪する。盗したものも、また罪する。』といふ三箇條を約束する。」といって、秦の法令は、ことごとく廢してしまった。秦の人民は、大いに喜んだ。

きて、項羽は、行く行く、土地を攻め從へ、秦の都にはいらうとして、函谷關といふ關所に來ると、劉邦の兵卒が、すでに、これを守ってゐるので、項羽は、大いに怒って、たちまち、これをうち破って、鴻門といふ所に進んだ。その時、范增のいふには、「劉邦は、すでに、都にはいって、しきりに、人民の機嫌をとってゐるといふことです。きっと、皇帝になるつもり

から、この地の王となるのだ。しかし、われは、けっして、秦の

でせう。早くうってしまひませんと、劉邦に
しまひます。」といった。項羽は、これに從って、劉邦をうたうと
した。

項羽（こーう）のをぢに、項伯（こーはく）といふものがある。張良（ちょーりょー）とは、大のな
かよしであった。そこで、夜、そっと、覇上（はじょー）の陣に行って、張良を呼
び出し、くはしく、そのことを告げて、「いっしょに逃げよう。」と
すゝめた。けれども、張良は「危い時に、君を見捨てるのは
不忠だ。私はわが君にこのことを告げなければならな
て、きっそく、項伯を呼び入れ、いろ〳〵ともてなしていふ

には、「じぶんは、都にはいってこのかた、まだ、何にも手をつけず、一々、官吏、人民をしらべ、寶庫を封じて、項羽殿の來られるのを待ってゐる。あの函谷關を守らせたのは、ただ、他の盜賊にそなへたまでゝ、けっして、惡意のあったわけではない。これから歸って、項羽殿にこの事を話してもらひたい。」といった。項伯はこれを承知して、「しかし、あした、鴻門に行って、いちおーに、項羽におあひになるがよい。」といって、鴻門に歸った。そして、項羽に劉邦のことばを話して、きて、いふには、「劉邦は大きなてがらを立てた人だ。てがらを立てた人をうつのは、はなはだよろしくない。いまに、劉邦が來たら、じゅーぶんにもてなしてやるがよい。」といって、い

ろいろと、項羽をなだめた。

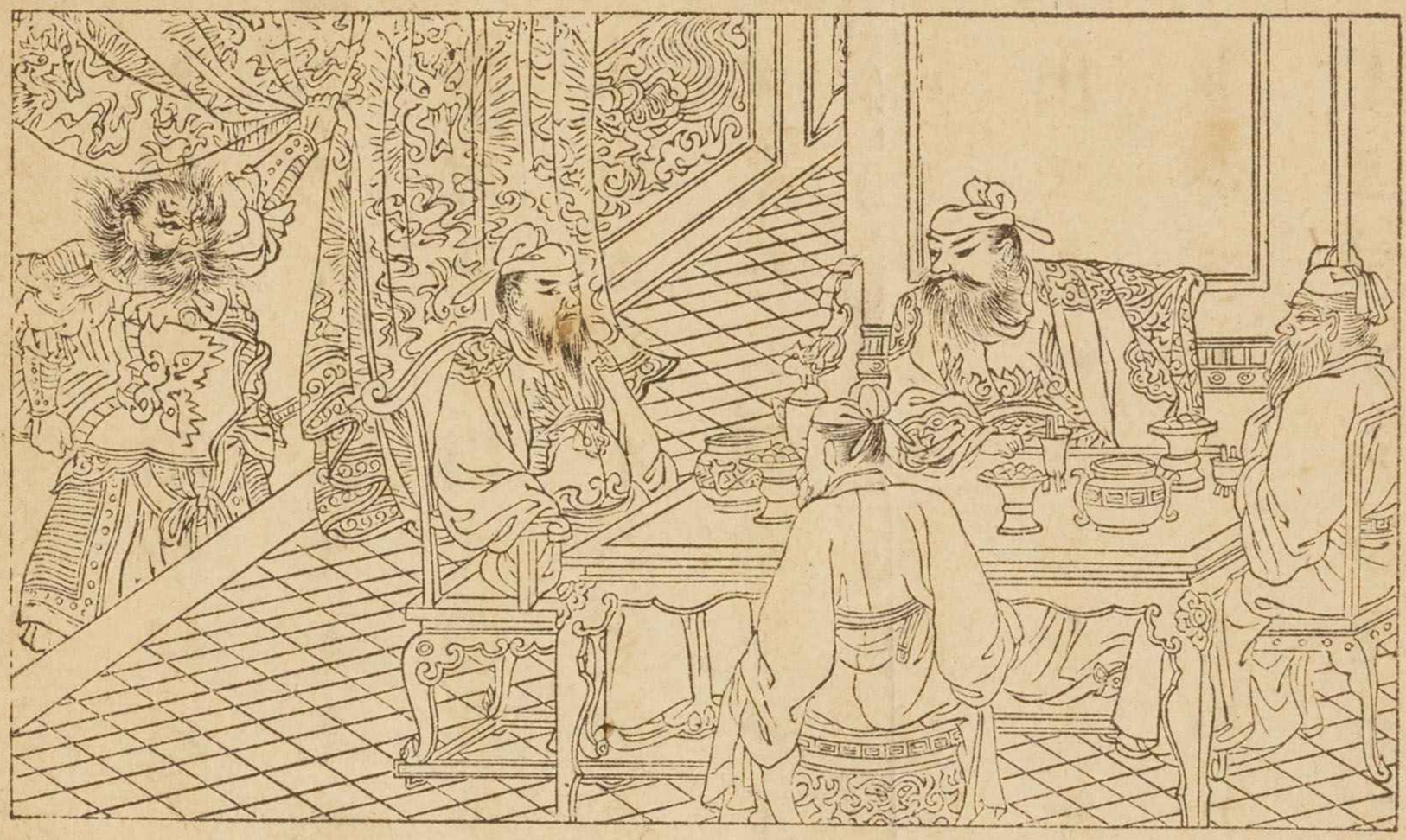
第八課　鴻門の會。（二）

あくる朝、劉邦は張良、樊噲をつれて、鴻門に行った。そして、項羽にいふには、「私はあなたと力を合せて、秦を攻めました。あなたは、黄河の北で戰はれ、私は、黄河の南で戰ひました。しかし、私に、まづ、秦の都に攻め入ることができたのは、じぶんながら案外です。私に、惡意はありません。わるく思ってくださるな。」といふと、項羽も「あなたをうたうとしたのは、私の心から出たのではありません」。といって、いろ〳〵と、ちそーをして、劉邦をもてなした。

項羽と項伯とは、東向にすわってゐた。范增は、南向にすわってゐた。劉邦は、北向に、張良は、西向にすわってゐた。范增は、

てゐた。劉邦（りゅーほー）は、北向に、張良（ちょーりょー）は、西向にすわってゐた。范增はたびく、項羽にめくばせした。これは、劉邦をふのである。しかし、項羽は、なか〳〵應じなかつた。そこで、范増は、そっと出て、項荘（こーそー）といふものを呼んでいった。「おまへは、これから、宴會の席に行って、あいきつをして、劍舞（けんぶ）をせよ。それがすんだら、劉邦を、一擊に擊ち殺せ。」と。そこで、項荘は、いひつけられたとほり、宴會の席に出て、あいきつをしていふには、「陣中のことで、音樂を奏するものもをりません。さぞ御退屈（たいくつ）だらうとぞんじますから、ひとつ、私が劍舞をいたしませう。」といって、劍を拔いて、たってまった。すると、項伯も、たってまひ、そして、しじ。

ー劉邦をかばふよーにするので、項莊は殺すをりがなかった。



張良（ちょーりょー）は主君の身の危いのを見て、にはかに、座を立って、門外に居る樊噲（はんかい）の所に行って、このことを告げた。樊噲は、大いに怒って、劍をおび、盾（たて）をたばさんで、門内にはいった。そして、宴會の席の幕（まく）をかゝげ、西向に立って、項羽（こーう）をにらみつけた。髪（かみ）の毛は、まっすぐに立ち、めじりは裂けんばかりである。項羽は劍のつかに手

をかけて、みがまへして、「あれは何ものだ。」張良「やはり、わが君、劉邦（リウパン）のけらいでございます。」項羽「元氣な男だ。酒を飲ませよ。」そこで、大きなさかづきで、酒を飲ませると、樊噲は、一息に、これを飲みほした。項羽「肴に、豚（ぶた）の肉をやれ。」そこで、豚の肉をやると、樊噲は盾をふせ、これにその肉を載せて、劍を拔いて、切って食べた。項羽は樊噲に向って、「いかにも元氣な男だ。もっと飲まないか。」樊噲「いくらでも飲みます。しかし、まづ、あなたにお聞き申したいことがある。あなたは、なぜ、わが君を殺そうとなさる。わが君は、第一に、都に攻め入って、大きなてがらをおたてになった。それを、なぜ、殺そうとなさる。つまらんものゝ言を信じて、て

がらのある人を殺きうとまひだ。きっと、あなたのために答へなかった。

そのとき、劉邦は立って、かはやに行った。樊噲も、張良もついて出た。そこで、劉邦は、張良に、白い璧、二つと、玉の酒器、二つとをわたして、これを項羽と范增とにひのこし、じぶんは樊噲をつれて、間道から、覇上の陣にはせ歸った。

張良は劉邦が覇上の陣に着いたと思ふ頃、席に歸って、項羽に向って、「わが君は、酒をいただきすごして、おいとまのあいさつをすることもできません。それは、秦の二の

けて、白い璧、二つをあなたに、玉の酒器、二つを范增殿に

けて、白い璧(たま)二つをあなたに、玉の酒器二つを范增(ぞー)殿に奉らせます。」といって、それをきし出した。項羽「劉邦殿は、どこに行かれた。」張良「あなたの御機嫌(ごきげん)の、まだなほらない様子を見て、逃げて行きました。たぶん、今頃は、覇上の陣に歸ってをりませう。」項羽は璧を受けて、そばに置いた。范增は酒器を受けて、下に置き、劍を抜いて打ちこはして、「あー。わが君は、とてもだめだ。皇帝となるものは、きっと劉邦だらう。われ〳〵は虜(とりこ)にされるだらう。」といった。

劉邦(りゅーほー)は、この後。はたして、項羽(にーう)を亡して、支那の皇帝となった。後に、漢の高祖といはれるのは、この劉邦のことである。

第九課　諸葛孔明。

漢の後におこりたる世を後漢といふ。後漢の末は、世乱れに乱れて、英雄、四方におこり、おのく、一方に割據したりしが、つひに、いはゆる三國の世となり、蜀の劉備、魏の曹操、吳の孫權の三人、たがひに、勝敗を爭ふにいたれり。この三人は、いづれも、當代の英傑なれども、智德かねそなはり、よく、下を率ゐたるものは劉備なり。されば、その下には、忠臣、義士多く、みな、まごころをつくして、これを助けたり。そのうち、諸葛孔明は、もっともあらはる。

孔明、はじめ、乱を避けて、山野にかくれ、田畝を耕して、その日を送りたりしが、劉備、これを迎へんとて、風雪をお

かして、その寓居をたづぬること三度に及びければ、つひに出でて、仕へたり。劉備、あるとき、「われに、孔明あるは、なほ、魚に、水あるがごとし。」といへり。その孔明を信じたることの深きを知るべし。

その後、孔明は、劉備にすゝめて、呉と和して、魏にあたり、蜀、漢中などの土地を領してつひに、帝位に卽かしめたりしが、帝の崩じたる後は、また、その遺詔を奉じて、幼主劉禪を助け、身をふるまで、一度も、敵國の侮を受けしめざりき。

かつて、魏の將、司馬仲達と對陣し、しきりに、戰をいどめども、仲達、恐れて、つひに戰はず。孔明、すなはち、婦人の服

の日を送りたりしが、劉備、これを迎へんとて、風雪をお

をおくりて、その卑怯なることを嘲りたり。その使者仲達の軍に到りしとき、仲達孔明の起居を問ふ。使者答へていふ。「諸葛公、朝は早く起き、夜は遅くいたりて、したしく、事をとりたまふ。しかも、食ひたまふことは、一日、三四碗にすぎず。」仲達喜んでいふ。「孔明の命も久しからざるべし。」いまだ、幾日もへぎるに、孔明、はたして死せり。蜀の軍、その棺を護りて、國に歸る。仲達これを追ふ。蜀の軍、すこしもきわがず、たちまち、旗を反し、鼓をならして、これに向ふ。その旗鼓、すこしもみだれず。仲達、大いに驚き、「孔明は、いまだ死せざりけり。」とて、軍を率ゐて逃げ去れり。時の人、諺を作りて、「死にたる孔明生きたる仲達を走ら

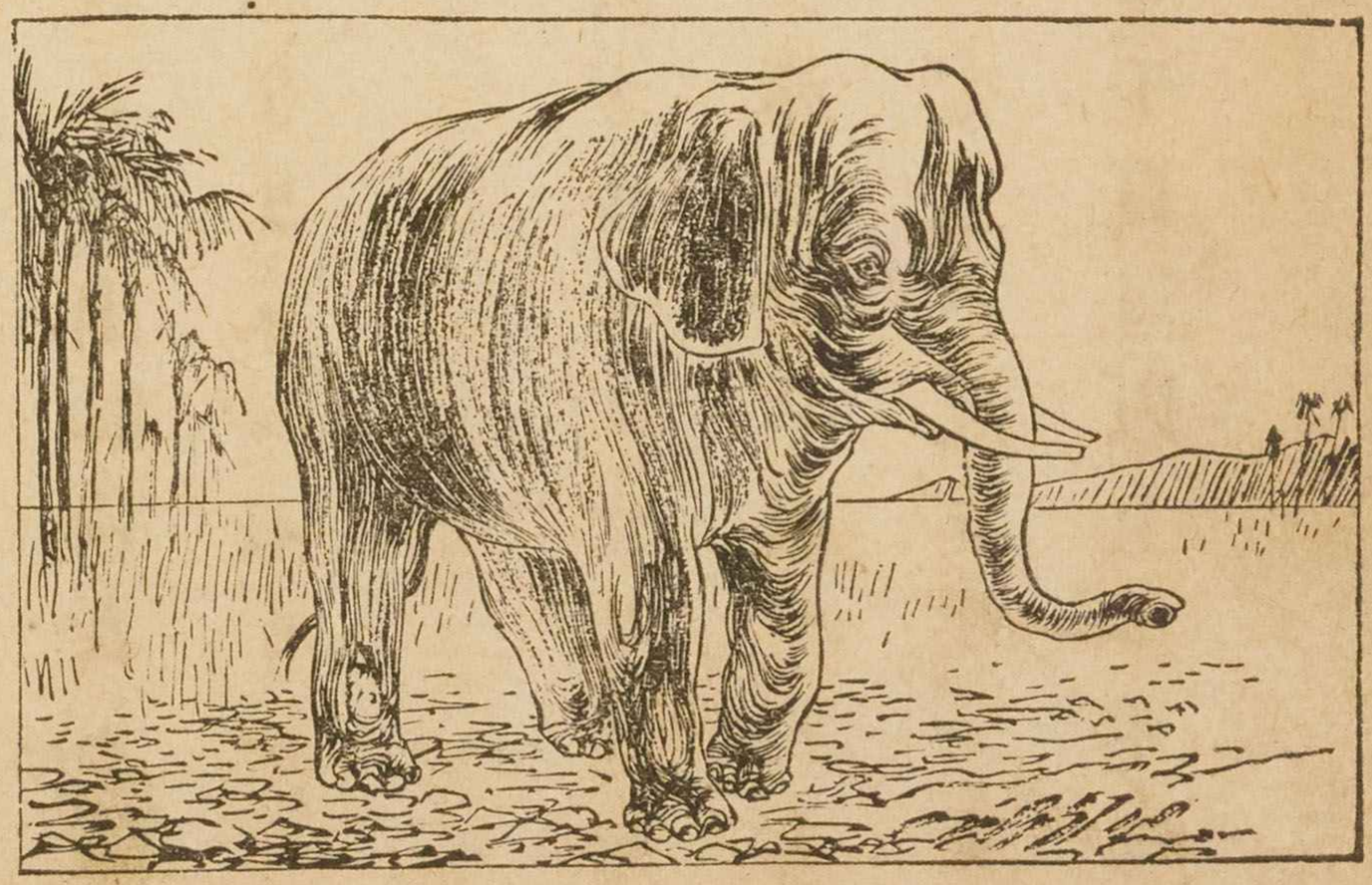
す。」といへり。

孔明（こーめい）の、幼主、劉禪（りゅーぜん）に奉りたる書に、出師（すいし）の表（ひょー）といふものあり。句々、まごころより出でたるものにして、讀むものをして、感涙にむせばしむ。されば、古より、「出師の表を讀みて、泣かざるものは、かならず不忠なり。」といへり。

第十課　象（ゾー）。

象（ゾー）ハ、陸上ニスム動物中、モットモ肥大ナルモノナリ。インド、アフリカナドノ熱帶地方ニ、多ク産ス。ソノ高サハ、七八尺ヨリ、一丈餘ニオヨビ、長サハ、一丈二三尺ヨリ、一丈七八尺ニオヨブ。マタ、重サハ、ジツニ、千貫目以上ニオヨブモノアリトイフ。

象（ゾー）ノ皮膚（ヒフ）ハ灰白色ニシテ、目ハ、ワリアヒニ小サク、耳ハヒラタクシテ、大ナリ。鼻ハ、ハナハダ長クシテ、前方ニタレ、屈曲自在ナル形ヲナセリ。象ハ、頸（クビ）、ハナハダ短クシテ、口ヲ地上ニ達セシムルコトアタハザルガユヘニ、食物ハ、鼻ノ先ニテツカミテ、鼻ヲ曲ゲテ、口ニ投ゲ入レ、水ハ、鼻ノ孔（アナ）ニ吸ヒ入レテ、口ニ吹キ入ルナリ。鼻ハ、マタ、感覚（カンカク）、ハナハダ鋭クシテ、ヨクモノヲモサガシテ、コレヲ拾ヒ、力、ハナハダ強クシテ、ヨ



ク、木ヲコギ倒シ、重キモノヲモ、捲キテ運ブ。上顎（ウハアゴ）ニハ、大ナル、二本ノ牙アリテ、長サ、六七尺ヨリ、一丈餘ニオヨブモノアリ。

象（ゾー）ハ、ツネニ、群ヲナシテスメリ。群ゴトニ、カシラ長アリ。長ハ、ソノウチニテ、年長ケタル象ナラズ、ソノ隨ヒ、弱キ象ヲバ、中ホドニ置キテ行ク。コレ、敵ノ攻メ來ルヲ防ガントテ、カネテ用意スルナリ。マタ、日中ニハ、暑サヲ避ケンガタメニ、深林中ニ遊ビ、アルヒハ、池、河ナドノ水中ニ浴シ、夜、涼シクナレバ、所々ヲ歩ミ象（ゾー）ハソノ四肢肥大ナレドモ、走ルコト速カニシテ、ヨク、

一時間ニ、五六里ヲ走ル。マタ、ソノ鼻ヲフルヒ、牙ヲ怒ラストキハ、虎（トラ）ナドノゴトキ猛獣モ、ヨーイニ、ソノ勢ニ敵スルコトアタハズトイフ。サレド、象ハ、オホムネ、木ノ葉、果實、穀物ナドヲ食ヒ、虎ナドノゴトク、他ノ動物ヲ捕ヘ食フコトナシ。性質、キハメテ溫順ニシテ、婦女子モ、ヨク、人ニ馴レ、運搬（ウンパン）ナドノ勞ヲ助ケシムルコト、ホトンド、ワレラノ牛馬ヲ使フニ異ナラズトイフ。

人ハ、深林、マタハ、原野ヨリ捕ヘ來リテ、コレヲ飼ヒ、耕作（コーサク）、象（ゾー）ノ牙ハソノ質堅ク、彈力（ダンリーク）アリテ、美シキ光澤（コータク）アリ。サレバ、種々ノ細工物ヲ作ルニ用フ。マタ、象ノ皮（ヒ）ハ、

ヒテ、靴ナドヲ製スルニ用フ。

第十一課　象狩の話。

いんどの東南の方に、せいろんといふ、わが九州の二倍ほどある、大きな島がある。そこには、所々に、深林があって、象が、多くすんでゐる。土人はそれを捕へるに、よほどおもしろい方法を用ひる。

まづ、象の居る深林を選んで、その近所の立木を、そのまま、柱にして、一つの柵をこしらへる。それは、よほど大きくて、時としては、周圍が數まいるにもわたることがある。柵の一方には、ただ一つの入口をあけておく。それは、狩り出された象の群が、その柵の中に逃げこむよーに

八種々ノ細工物ヲ作ルニ用フ、マタ象ノ皮ハ象皮ト

しかけたのである。

柵が、すっかりできあがると、多くの土人は、てんでに、たいまつをふりながら、象の群を遠巻にして、だんく〳〵と、柵の方へ狩りたてる。象の群はたいまつの光を見て、驚いて逃げ出す。そして、だんく〳〵、柵に近づいて來ると、棒や槍を持ってゐる土人が、いっせいに、ときの聲をあげて、その棒で、そこらをたゝいたり、槍をふったりする。そこで、象の群は、ますく〳〵驚いて、うろたへて、「どこにか、逃口はないか。」ときがしまはるずると、柵の間に、一所、隙間があるので、象の群は「よい逃口だ。」と思って、恐ろしい勢で、みな、その中にかけこむ。この逃口と思ったのは、土人が、かねてあけ

ておいた柵の入口である。象の群が、みなかけこむと、土人はその入口を閉ぢる。象は、まんまと、土人の謀（ほかりごと）にかかったのである。

土人は、これから、この柵（さく）に閉ぢこめた象（ぞう）を、一匹づつ、外へ誘ひ出すのであるが、それには、四五匹の馴れた象を、をとりに使ふのである。その象は、土人が、かつて、これと同じ方法で捕へて、よく飼ひ馴しておいたものである。」

さて、馴れた象が柵の中の象を、一匹誘ひ出すと、土人は、すぐに、入口を閉ぢる。誘ひ出された象は「逃げよう。」と思ってあれだす。馴れた象は、四方から、それをとり巻いて、その長い鼻で、その象のからだを、輕くたゝいて、いろ〳〵

と慰める。それで、その象は、だん〳〵しづかになって、いっしょに歩くよーになる。馴れた象はそれを、大きな木の下までつれて行く。そのとき、土人はあとをつけてきて、じょーぶな繩（なは）を象の足に投げかけて、その木に、固く〳〵りつけてしまふ。馴れた象は、また、柵の中にゐる、他の象を誘ひに行く。〳〵られた象は、これを見て、「いっしょに行かう。」と思って、しきりにあせる。けれども、行くことができないので、大聲にうなって、「く〳〵りつけた、大きな木も根こぎにきれるか。」と思はれるまでにあれきわぐ。そのとき、土人は、象（ぞー）の好きな椰子（やし）や木の葉などを持って來て、食はさうとする。象は、はじめのうちは、それをはね

飛ばしたり、ふみにじったりして、なかく、食はうともしないが、はらのへってくるのには、こらへることができないで、そこらにちらばってゐるものを、一つ食ひ、二つ食ひ、つひには、土人の、きらに持って來るものまでも、喜んで食ふよーになる。

かうして、四五日もたつうちには、象は、だんく、おとなしくなってきて、飼主の命令に從って、いろく、な仕事をとりの役をもつとめるよーになり、また、をるのである。

第十二課　はわい出稼人の手紙。

拜啓。出發の際は、わざく、御見送りくだされ、

ありがたく存じたてまつり候。海上、何の障もなく、きる二十日到着いたし候間、御安心くだされ度候。はじめ、數日の間は、諸方を見物いたし、その後は、當ほのるるにおいて、製糖業に從事いたしをり候。

きて、はわいは、御承知のごとく、日本の東、およそ三千四百まいるの海上に御座候て、十二の群島より成り立ち、面積は、全體にて、わが四國ほどに御座候。もとは、一獨立國に候ひしが、數年前、あめりか合衆國の一部とあひなりをり候。ほのるるは、おあふと申す島にある、はわい第一

の都會に御座候。市街の整へることゝいひ、學校、博物館、公園などの備はれることゝいひ、西洋の都會にも劣らざるよしに御座候。ことに、中央には、本邦人の商店多く、ことに、本邦人の商店多く、ことに、中央には、本邦人は、本邦人の商店多く、ことに、中央には、本邦人のたてたる、日本商會の壯大なる建物もこれあり候。

はわいの人口は、およそ十五萬人ほどこれあり、その二割ほどは、土人にて、他は、みな、外國人のうち、本邦人は六萬人あまりにて、他の外國人全體と匹敵するほどの多人數に御座候。本邦人の多くは勞働者にて、お

もに、製糖會社などに傭はれて、きとーきびの栽培、製糖などに從事いたし居候。日給は一圓以上に御座候へば、本國に居たる時よりは、收入、はるかに多く御座候。したがって、巨額の貯蓄をなせるもの、多くありとのことに御座候。

衣食住の有樣は、あまり、本國と相違いたし居らず候。また、本邦人の醫業などをいとなめるものも、多く御座候へば、かく遠き所にたしなくも、きらに、心細きこともこれなく、まったく、本國にあるがごとき心地いたし候。

當地は熱帶地方に候へば、よほど暑かるべし

と思ひ居候とこ
候へば、海風、つね
どにはこれなく、氣候の變化少くて、よ
し易き方に御座候。
まづは、安着の御報知、かたがた、當地の模様、あ
らまし申し上げ候。敬具。
七月六日
佐藤徳藏
叔父上様。

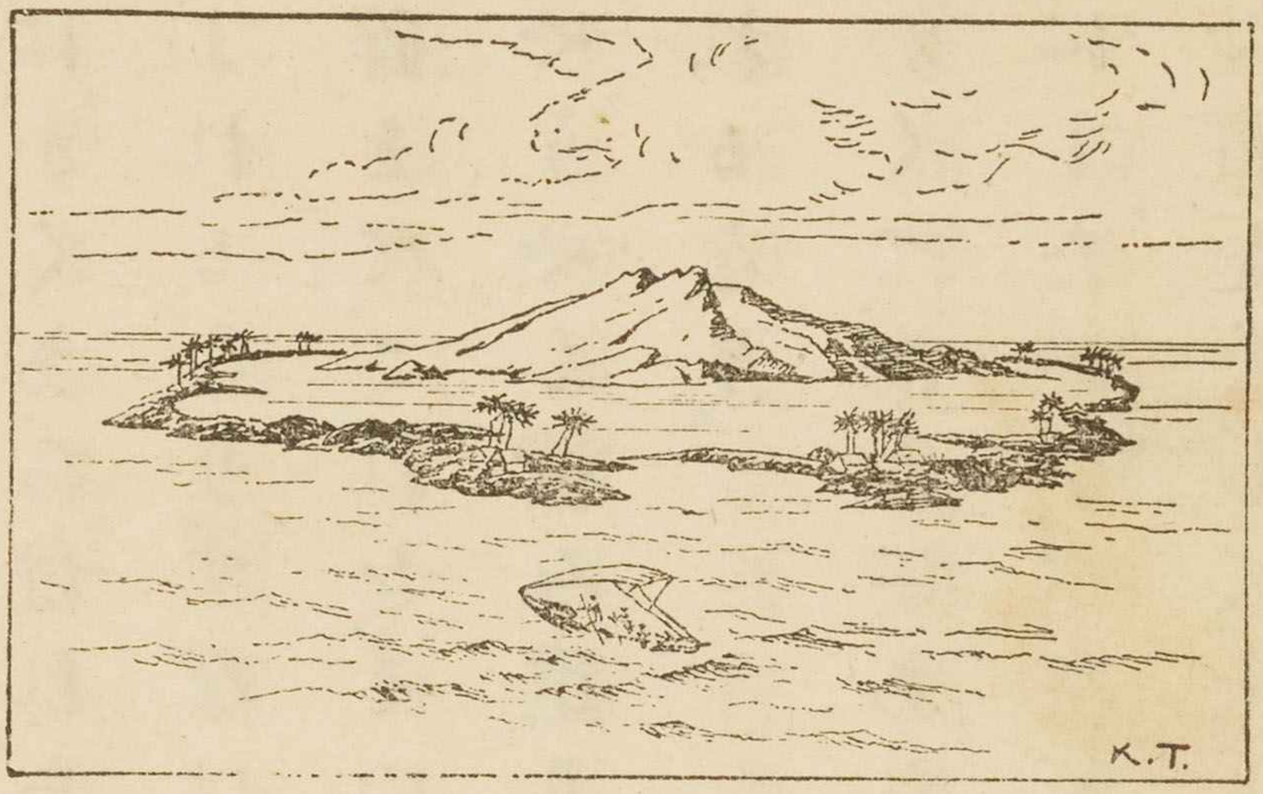
第十三課　珊瑚

婦人の根掛（ねがけかんざし）、簪の珠などに用ふる珊瑚（さんご）は、もと、海底にあ
りしものにして、珊瑚虫（さんごちゅう）といふ動物の造りたるものな

當地は熱帶地方に候へば、よほど暑かるべし

り。珊瑚虫は、きはめて微小なる動物にして、百四五十尺までの海底に、幾千萬となく群生し、つねに、水中より、石灰質を吸收し、ふたゝび、これを分泌して、堅き骨質の殻を作る。かくて、その殻、しだいに積み重りて、つひには、木の枝のごときものとなるにいたる。その色は紅色、または、白色にして、海上の穏なる日、これを透し見れば、美しきこと言はんかたなし。

珊瑚虫は、また、岩礁、また珊瑚礁を造ることあり。珊瑚礁は多く、と同じ方法にて、珊瑚礁を選びて、これ海中に隠るゝものなれども、中には、干汐のときに、その一部の、海上にあらはるゝものあり。また、つねに、海上に



あらはれたるもあり。つねに、海上にあらはれたるものは、二種の別あり。一は、その形により、大陸に沿ひて、牆壁（しょうへき）を繞らしたるごときものにして、これを牆壁礁（しょうへきしょう）といひ、一は、海の中に、環のごとき形して、中に、島の周圍、また海水をたゝへたるものにして、これを環礁（かんしょう）といふ。牆壁礁の長きものは千まいる以上にわたり、環礁



の大なるものは直徑四五十まいる以上に達す。

そもく、珊瑚虫は、海水中に生活して、殻を造るものゝあるは、まったく、海洋の力によれるなり。ずなはち、海洋の大波、珊瑚礁の外部を打ち碎きて、これを、その上にうち上ぐるがゆゑに、その碎片、やうやく積み重りて、つひに、海面にあらはるゝにいたれるなり。

かくて、海面にあらはれたる部分は、多くの年月をふるにしたがひ、水、空氣などの作用によりて、しだいに、その性質を變じて、土となれば、他の陸地より漂ひ來れる椰

子樹(し)などの種子、こゝに附着して、成長するに
平洋、または、いんど洋の、熱帯に屬する海洋を航すると
き、海洋中の牆壁(しやうへき)、または、環
などの生ひ茂れるものあるを見るは、おほむ
り。その風景、はなはだ美しくして、じつに、航海中の一奇
觀(かん)なり。

第十四課　にゅーとん。

にゅーとんは、今より二百六十餘年前、いぎりす
る理學の大家なり。幼き時は、身體、はなはだ虚弱(きよじやく)にして、
成長もおぼつかなきほどなりしが、母と祖母との綿密(めんみつ)
なる注意によりて、やうやく成長することを得たり。

にゅーとんは、七歳の時、はじめて、學校に入りしが、はじめのほどは、はなはだ怠惰にして、成績、つねにあしかりき。されど、後、きとるところありて、大いに奮發し、つひには、級中の首席を占むるにいたれりといふ。かくて、遊ぶときにも、つねに、小さき機械仕掛の玩弄物を作ることを何よりの樂としたりとぞ。

時計を作り、ある時は、水時計、日磨車を作り、ある時は、車上の人の力にて運轉する器械つか鼠をして廻轉せしむる粉車などを作りたりしが、いづれも、おもしろからしたるものなりき。

にゅーとんの十五歳の時、母はにゅーとんを退學せし

めて、所有の田地を耕作(こーさく)せしめたり。されど、にゅーとんは、その心耕作の業に向はざりければ、ひまだにあれば、生(ふ)によこたはりて、書を讀み、しづかに、種々の問題を研究したり。叔父なる人、そのさまを見て、つひに、母に說きて、ふたゝび、學校に入れしめたり。

にゅーとんは、大いに喜び、ますゝ勉强して、進んで、大學に入りしが、數學は、その、もっとも得意とするところなりきといふ。二十三歳のとき、大學を卒業せしが、その後も、なほ、研究に餘念なかりしかば、つひに、種々の、理學上の發見をなすにいたれり。そのうち、もっとも有名なるは引力(りょく)の法則(ほーそく)を發見したることなり。

これよりきき、にゅーとんは、つねに「何故に、月、地球などは、すべて、一直線には進まずして、月は地球の周圍を廻轉し、月、地球は太陽の周圍を廻轉するものならん。」と疑ひ研究しゐたるに、たまく、一つの林檎、風なきに、地上に落ちたり。にゅーとんは、これを見て「かく、林檎の落つるは、地球に、これを引く力あればなり。」と考へたりき。されど、この考は、新しきものにはあらずして、すでに、他の學者の考へたるものなりしが、にゅーとんは、さらに、一歩を進めて、

「今、もし、この、地球の引く力が林檎を引くのみならず、

すべて、高く、空中にかゝれる物體をも引くものならば、同樣に、月をも引かぎるべからず。したがって、月は、一直線に進まんとすれども、この、地球の引く力のきゝふるがために、かく、地球の周圍を廻轉するものなるべし。また、月、地球などの太陽の周圍を廻轉するは、太陽に、いっそー強き引く力ありて、これをきゝふるがためなるべし。」

と考へたり。かくて、この理を正しとは思ひたれども、よーいに、これを證明することあたはぎりしが、その後、十六年を經て、その得意とせる數學によりて、精密（せいみつ）なる計算をこゝろみ、つひに、その理の正しきことを證明する



ろんどんにて死にたり。

ことを得たり。

このころ、にゅーとんは大學の教授となりたりしが、後、さらに、しゅーぎいんの議員に選ばれたり。かくて、老後には、ぞーへいきょくちょーは造幣局長となり、八十五歳の時、

第十五課　獅子。

獅子ハ、アフリカ、アラビヤ、インドナドノ熱帯地方ニ産スル猛獣ナリ。昔ヨリ、獣類ノ王ト稱セラル。

獅子ハ、身長七尺ニ及ブモノアリ。頭、ワリアヒニ大キク、毛色、オホムネシテ、胸張リ、腹細シ。ソノ長ジタルモノハ手

黄褐色（コーカッ）ナレドモ、幼稚ナルモノハ、體ニ、薄黒キ斑紋（ハンモン）アリ。

獅子（シシ）ハ、容貌（ヨウボー）、ハナハダ鋭ク、耳ハ、直立シテ、前方ニ出デタリ。コトニ、牡ニハ、鬣（タテガミ）ア

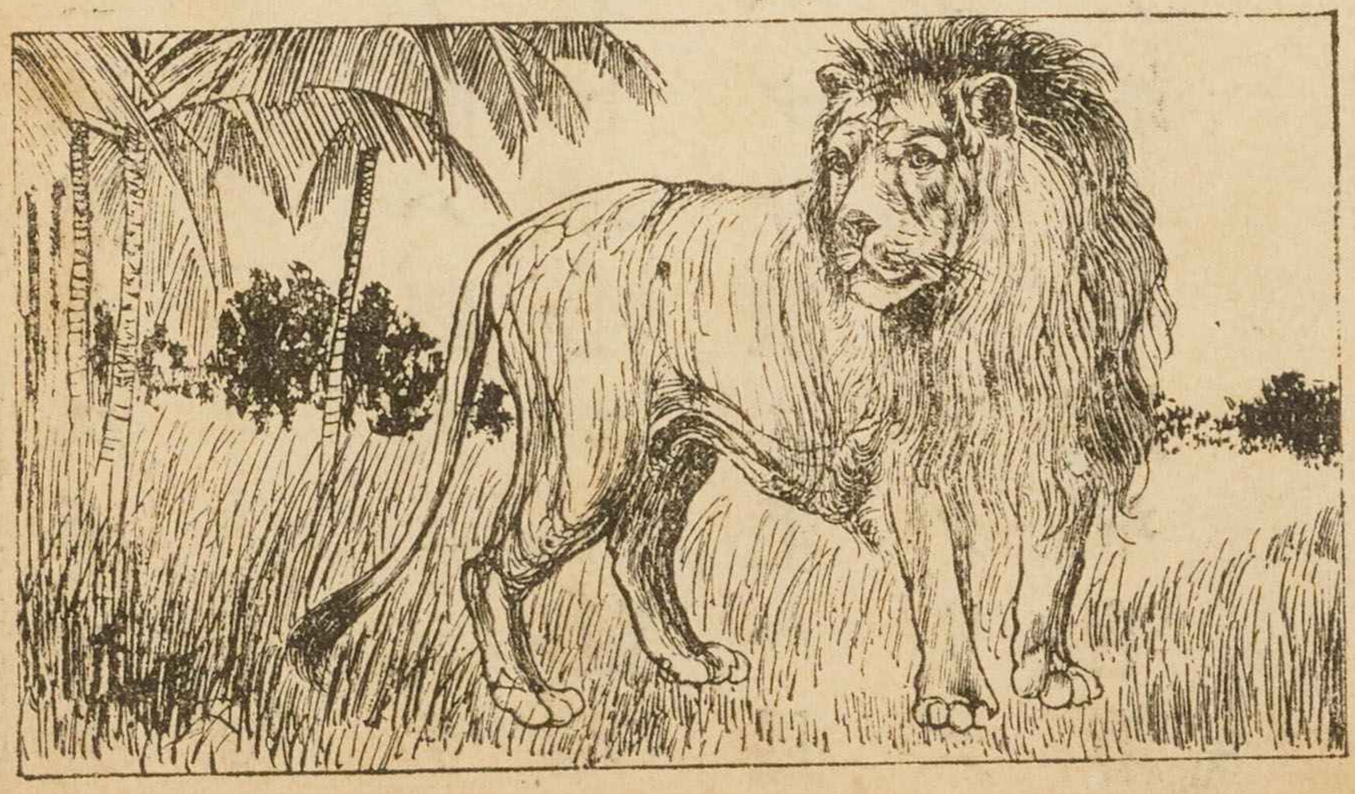
リテ、ソノ容貌ニ、イヅソクシテ、ヤヽ、黒色ヲオビ、頭ノアタリヨリ頸（クビ）ノ毛ハ長

カケテ、フサ〳〵ト群生セリ。マタ、尾ノ端ニモ、長キ毛集リ生ジテフサヲナセリ。

獅子（シシ）ハ、猫屬（ビョウゾク）ノ獣ニシテ、虎（トラ）トソノ類ヲ同ジクシ、身體ノ構造モ、マタ、アヒ似タリ。

獅子（シシ）ハ、オモニ、沙原ノ藪、岩窟（ヤブガンクツ）ノ中ナドニスミ、夜出デテ、

食ヲ求ムルヲツネトス。ソノ食ヲ求ムルトキハ、川、マタハ、泉ニ近キ草叢（クサムラ）ノ間ナドニ、身ヲ伏セテ、他ノ獣類ノ水ヲ飲ミニ、草ヲ食ハントテ來ルヲ待ツ。カクテ、獣類ノ來リ近ヅクヲ見レバ、タチマチ飛ビカヽリテ、コレヲ捕フ。サレド、モシ、誤（アヤマ）リテ、捕フルコトヲ得ザレバ、サラニ、身ヲ伏セテ、他ノ獣類ノ來ルヲ待ツナリ」。



ズ。サレド、獅子ハ、食ニ餓(ウ)エタルトキ、マタハ、ナシ。タルトキナドニアラザレバ、ミダリニ、人ヲ害スルコトヲ、モ、口(カキ)牆ナドヲモ飛ビコユルコトアリ。マタ、ソノ步ムコト、ツネハ、力、ハナハダ強クシテ、牛ノゴトキ、大ナル獸類ヲラズ、獅子(シシ)ハ、多ク、夜間ニ吼(ホエ)ユ。ソノ響(ヒビキ)、アタカモ、遠雷ノゴトク、萬獸聞キテ、オソレ伏ストイフ。マタ、シバ〳〵、群ヲナシテ、アヒ和シテ吼ユルコトアリ。モシ、他ノ群ト會スルコ

トアレバ、マス〳〵高ク吼エテ、タガヒニ、優劣ヲ爭フトイフ。

獅子（シシ）ハ、カヽル猛獸ナレドモ、ソノ子ヲ愛スルコト、キハメテ深ク、生後、オヨソ三年ノ間ハ、ツネニ、ソノソバニオキテ、コレヲ養育ストイフ。

第十六課　母の愛。

「獅子（ししし）は、檻（をり）より逃げ出たり。

鐵のくさりを引き切って。

こちらへ來るぞ。かまるなよ。

あぶなし。逃げよ。」と叫ぶ聲。

聲を聞くよりをのゝきて、

誰も、わが家にかけこみぬ。
街は、たちまち人影もなくなりにけり。
こゝに、一人の幼子は
母の手許をたちはなれ、
井のほとりに居たりしが、
遊のわぎの樂しきに、
心奪はれ、「逃げよ。」との
聲も、耳には入らざりき。
きれど、あはれや、誰、一人、
行きて助くるものもなし。」

獅子はたけりにたけりつゝ、
狂ひまはりて吼(ほ)ゆる聲、
いよ〳〵近くなりたれど、
なほ、幼子は餘念なし。
つひに來りぬ。そのそばに。
眼(まなこ)はもゆる火のごとく、
爪は劍(つるぎ)をとぎたてゝ、
たゞ、一口と飛びかゝる。」
このとき、髮(かみ)をふりみだし、
走り出でたる一婦人。
見るより、誰も叫びたり。

「あぶなし。止めよ。ひきかへせ。
行きなば、獅子の餌となるぞ。
あゝ。不運なる子の母よ。
行くとも、もはや、救はれじ。
行かば、二人が殺されん。」
婦人は、耳にも入れずして、
すでにくはへし幼子を、
怒れる獅子に飛びつきぬ。
獅子は驚く、その子の口より奪ひとる。
その子は、無事に救はれぬ。

かくて、疵（きず）だになかりしは、
母の慈愛（じあい）にほかならず。」
この有様を見し人は、
老いたる、若き、おしなべて、
母の慈愛の一念を
強きものぞと、感じけり。
今までふるひをのゝきし、
他の子の母もいひけるは、
「われも、わが子のためならば、
いかで、命を惜まん。」と。

第十七課　皮膚（ひふ）の養生。

われ〳〵の身體のそとかはを包んでをる皮膚は、その内部にある、種々のものを保護するものであるが、まだ、すなはち、皮膚は、その表面にある、多くの、小さい孔から汗を出して、體溫をほどよくし、血液を清潔にし、毛孔から脂を出し、皮膚をなめらかにして、少々のことでは、傷を受けることのないよーにするものである。また、肺臟のよーに、いくらか、呼吸もするのである。

ところが、皮膚は、たえず、こまかに剝げたり、また、汗や脂のかすが殘ったり、汗や脂に、空氣中のちり、ほこりなどがついたりするので、皮膚には、たえず、垢ができる。

第十七課　皮膚の養生

垢(あか)ができると、汗の出る孔(あな)や、毛孔(けあな)がふさがってしまひなどして、皮膚(ひふ)は、じゅーぶんに、その作用をすることができないよーになる。それればかりではなく、からだに、寒氣(さむけ)がしてきて、いやなこゝろもちがするよーなこともあり、にきびやできものなどができるよーなこともある。それだから、皮膚は、つねに、清潔にしておかなければならない。

皮膚(ひふ)を清潔にするには、ときどき、湯にはいり、しゃぼんを使って、垢(あか)を、きれいに洗ひ落すのが、いちばんよい。また、朝起きた時などに、冷水に浸した手拭で、よく、皮膚を拭って、そのあとを、乾いた手拭で、すこし赤くなるまでこする

のもよい。さうすると、皮膚が清潔になるばかりではなく、また、たいそー強くなって、少々のことでは、かぜをひかないよーになる。また、皮膚は體溫をほどよくするものであるけれども、その作用には、限があるからわれ〳〵は着物を着てをるのであるが、それも、よのでは、かへって、皮膚の作用を妨げるから、つねに、洗濯したものを着るよーにしなければならない。

第十八課　しゃぼん。

「國の文明の度は、その國にて使用するしゃぼんのたかによりて、はかることを得べし。」と言ひたる人あり。まことに、國民の衞生を重んずる念、しだい

に強くなり、工業、ますく、隆盛となるにしたがひて、しゃぼんを使用することの、ぜんじ多きにいたるは、當然のことゝいふべし。

わが國にては、維新前は、その需要、きはめて少くして、わづかに、醫師の治療用に供するのみなりしが、維新後は、その需要、年々多くなりて、すでに、今日は、いかなる山間僻地の人にも使用せられざることなきにいたり、したがって、その製造業も、大いに盛なるにいたれり。

しゃぼんは、その使用せらるゝみちによりて、洗濯用しゃぼん、化粧用しゃぼん、醫療用しゃぼんなどに區別せらるれども、その性質の上よりいへば、そーだしゃぼん、かりしゃぼん

の二種あるのみなり。そーだしゃぼんは皮膚の垢を落し、衣服を洗濯することなどに用ひ、かりしゃぼんは羅紗、毛布、または、工場の機械を洗濯することなどに用ふ。

そーだしゃぼんを製するには、まづ、牛、豚の脂と椰子油などとを、ほどよく混和して、大いなる鍋に入れ、火にかけて融解せしめ、これに苛性そーだの溶液を加へて、かきまぜながら煮立つべし。かくて、これに塩水を加ふるときは、あまたの泡粒、その表面に浮び來る。この泡粒をすくひとりて、他の鍋に入れ、さらに煮立てゝ、少しく、この水分を去り、組箱に入れて固まらしめ、これを切りて、日光に乾かす。かくて乾きたるものは、すなはちそーだしゃ

ぼんなり。そーだしゃぼんの表面に、紋章などのあるは、乾かしたる後、かたに入れてうち出したるなり。

また、組箱に入れて固まらしむるにきだちて、これに種々の香料（こーりゃー）と染料（せんりゃー）とを加ふれば、そのあぶらくさきを去り、美しき色をつくることを得。しゃぼんは、一箇數錢のものより、數圓のものまであれども、しゃぼんにあらずして、多くは、それに加へたる香料の良否により、價に高低あるなり。

かりしゃぼんは、種油、麻實油（あさのあぶら）、魚油などに苛性（かせい）かりを加へて製す。これを製する方法は、大略、そーだしゃぼんなれども、その目的また、醫療（いりょー）用しゃぼんはそーだしゃぼんに同じ。

により、種々の消毒劑を加へて製するなり。

第十九課　ウラヂオストック。

ウラヂオストック、クハアジヤロシヤ第一ノ要港ニシテ、ワガ敦賀ヲ去ルコト、北方、五百海里バカリト、清國ニ屬スル一漁村ニスギザリシガ、今ヨリ、四十餘年前、ロシヤコレヲ領シテヨリ、熱心ニ、種々ノ計畫ヲ立テヽ、交通ノ便ヲハカリ、商工業ノ隆盛ト、兵備ノ完成トニツトメタリシカバ、ツヒニ、今日ノゴトキ繁榮ヲ來スニイタレリ。

港内ハ、ハナハダ廣クシテ、水深ケレバ、多クノ船艦ヲ入ルベシ。コトニ、三方、ミナ、連山ニテ圍マレタレバ、風波ヲ

避クルニヨシ。市街ハワガ國ノ神戸市ニ似テ、連山近ク、海岸ニ迫リ、街路ノ高低一樣ナラズシテ、家屋、アルヒハ、高ク、岡ノ上ニタチ、アルヒハ、低ク、ソノ麓(フモト)ニツラナレリ。サレド、市内ハ、商店軒ヲ並ベ、諸官衙(カンガ)、兵營、學校ナド、所々ニ散在シテ、ハナハダ繁榮(ハンエイ)セリ。

コノ港ハ、ロシヤノ東洋第一ノ大軍港ニシテ、マタ、第一ノ開港場ナリ。サレバ、鎭守府(チンジュフ)、造船所、砲臺ナドノ、コトゴトク、コヽニ設ケラレ、東洋艦隊、義勇艦隊、ミナ、コヽヲ根據(コンキョ)地トセリ。マタ、近來、コノ港ヨリ、滿洲(マンシュー)ヲ横切リ、アジヤロシヤヲ貫キテ、ペテルブルグニ達スル鐵道ヲ布設(フセツ)シタレバ、ヨーロッパトアジヤトノ交通、ハナハダ便利トナリ

テ、東西ノ貨物ノ集散地トナルニイタレリ。

コノ地ハ、カク重要ナル港ナレドモ、北方ノ海ヨリ來ル寒流ト、寒キ西北風トノタメニ、寒氣、ハナハダ烈シケレバ、毎年、一月ゴロヨリ、四月ゴロマデノ間ハ、港内ノ海水、一面ニコホリテ、ソノ厚サ二三尺ニ及ビ、マッタク、船艦ノ出入ヲ絶ツニイタル。サレバ、コノ間ハ、コノ地ノ貿易、ホトンド中止ストイフ。

現今、ワガ國人ノ、コノ地ニ居留スルモノ多ク、コトニ、ワガ國ノ定期船ノ往復モアリテ、ワガ國トノ貿易、年々、隆盛ニオモムケリ。

第二十課　ペてろ大帝。

今から、二百年ばかり前には、ろしやといふ國のあることを知らんものが、同じよーろっぱにきへ、よほど多かったといふことである。しかし、たまには、他のよーろっぱ諸國のものでその國の都、もすこーに行くものもあったが、いづれも、みな、そこの人情、風俗、習慣などが、あまりに、本國と違ってをるのに、大いに驚いたといふことである。まことに、當時のろしやは學問、技術も、いっこー進まず、制度、軍備なども、とんと整はん國であった。

しかるに、そのころ、非常なほねをりで、たちまち、その國の文明を進め、勢力を擴張(かくちょー)して、他のよーろっぱ諸國にも、あまり劣らんよーにした、一人の偉人がある。その偉人



ペてろ大帝は、すなはちペてろ大帝である。」

もめの絶え間がなくて、ずいぶん、辛苦をつくした人である。その帝位に卽いたのは十七歳の時で、父に死に別れた後は、うちわはなはだ賢明な人で、からだも、めたのは十七歳の時であるが、早くから、「國の文明を進めたいものだ。」と思って、學識あり、才藝ある外國人から、學問、技術や外國の制度などについて、教を受けてをった。大帝が政事を取りはじめてから數年の後、大帝は南方ごく強壯な人であったが、四歳の

のとることと戰って、あぞふ海岸の一部を領地にした。そこで「大いに、海運を盛にしよう。」と思ったが、この當では、まだ、造船術が、いっこー進んでをらなんだので、大帝は、じぶんで、それを研究してみようと決心し、政事を臣下にまかせておいて、はるばる、他のよーろっぱ諸國へ微行した。

當時、造船術にかけては、おらんだといぎりすとが進んでをったから、大帝は、まづ、おらんだに行って、尊い身をもかへりみず、ある造船所の職工となり、他の、多くの職工とともに、板を割ること、檣（ほばしら）をけづることから、金具をこしらへること、綱（つな）をなふことなどまで、少しも厭ふことな

く働いて、熱心に、造船術を研究した。それから、いぎりすにわたって、所々の造船所や、工場などを視察し、おーすとりやをもまはって、國に歸った。大帝は、國に歸ってから、ただちに、改革にとりかかって、國の進歩をはかるとともに、まづ〳〵、その版圖をひろめようと企てた。

このころ、すえーでんは、よーろっぱの一大强國であったが、その王が、まだ幼少であるのにつけこんで、ぽーらんどの王とでんまるく王とが同盟して、その國を奪ひ取らうと企てゝをった。そこで、大帝も、また、この同盟に加はって、長い間、すえーでんと戰って、つひに、ばるとに沿ってをる、廣

い土地を得た。今の首府、ペてるぶるぐは、こ
もすこーから移したものである。
大帝は、すえーでんにうち勝った後、おらんだ、ふらんす、ど
いつなどを旅行してきて、國の風俗を改良し、商工業を
奬勵（しょうれい）し、制度を改革し、學校を設け、外國の書物を翻譯（ほんやく）す
るなど、ますく、國の進歩をはかった。
大帝は、五十三歳でなくなったが、死ぬるときまで、一日も、
その國の文明を進め、勢力を擴張（かくちょう）することを忘れなん
だ。
現今、ろしやは世界の一大強國であって、その版圖（はんと）はよー
ろっぱとあじやとにわたり、地球上の全陸地の、およそ六

分の一を占めてをるが、これは、その後の皇帝が、みな、ペてろ大帝の志をついで、忍耐と勇氣とをもって、その國の勢力の擴張（かくちょー）につとめた結果である。

をはり。

72432

国立国語研究所
1000605384

明治三十七年二月五日
文部省檢查濟

明治三十六年十一月二日印刷
明治三十六年十一月三日發行
明治三十七年二月五日翻刻印刷
明治三十七年二月八日翻刻發行

著作權所有

著作兼發行者　文部省
翻刻發行者　水野慶次郎　東京市日本橋區通油町拾八番地
印刷者　大橋光吉　東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　合資會社博進社　東京市小石川區久堅町百八番地

高等小學讀本五

定價金八錢

發行所　東京市日本橋區新右衞門町拾六番地　日本書籍株式會社

. 0
24